

成果区分「研究」の成果名と成果概要一覧

成果名	主担当研究室	成果概要
「にじのきらめき」における省力的かつ多収栽培に適した全量基肥肥料	水田	本品種に適した全量基肥肥料は、「窒素成分割合が速効：緩効＝50：50 かつ登熟期間に緩効性窒素の溶出が持続する」又は、「速効：緩効＝40：60 かつ出穂前20 日から出穂後20 日に溶出する」パターンを示し、目標収量630 kg/10a を確保することができる。
「キラリモチ」の苗立に影響する地温と播種晩限の条件	水田	二条裸麦「キラリモチ」について苗立数（100本/m <sup>2</sup> 以上）を安定的に確保するためには、日平均気温が5.6℃以下になる前に出芽揃となる必要がある。
水田転換畑における秋冬どり加工業務用キャベツの出荷予測技術	水田	秋冬どり品種「翠緑」の結球部直径（cm）、結球部重量（g）、株の最大径（cm）及び有効積算気温（℃）の間に強い相関が認められ、定植時、結球前の定植後20～40 日程度、収穫前14 日程度の3段階で収穫日の予測が可能である。
茨城県におけるかんしょの窒素吸収特性	環土	茨城県の黒ボク土において、かんしょは挿苗後30 日から90 日にかけて窒素吸収量が大きく増加する。腐植質黒ボク土では淡色黒ボク土より窒素吸収量及び上いも収量が多い。また、「ベニアズマ」より「べにはるか」の方が、同等の上いも収量を得る場合の窒素要求量が多い。
かんしょ栽培における秋冬緑肥の効果	環土	秋冬期間に緑肥を栽培しない場合と比較し、ライムギ後に栽培したかんしょ「べにはるか」の上いも収量は同等～やや多い。エンバク野生種と比較し、ライムギは乾物重、窒素吸収量、炭素量が多く、圃場へ供給される有機物量も多い。

作物：作物研究室 環土：環境土壌研究室 病虫：病虫研究室